

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 下記の文章を読んで空欄（ A ）～（ J ）に適切な語句あるいは数字を記入しなさい。

現在のヨーロッパの法体系の基礎にはローマ法があり、それは、日本を初めとして、ヨーロッパの影響を受けつつ法制度を整備した国々にも当てはまると一般に言われている。ローマ法は、本来ローマ市民権を持つ者に適用される法であり、私法がその重要な部分を構成しており、一般に市民法と呼ばれてきた。この法の発展の起源は古く前6世紀末まで遡る。この時期、ローマは王を追い出し共和政を樹立するが、貴族と平民の間で争いが生じていた。前5世紀初め、貴族は妥協し、平民の権利を護るために護民官と平民会の設置を認めたが、争いは続いた。ローマでは何が法であるかを決める権限を貴族である神官が独占していたが、この時平民がこれに対抗し、法の重要な部分を成文化させたのが（ A ）である。これがローマの成文法の始まりとなった。

法を解釈する神官の権限はその後に残るが、前300年には神官職が平民にも解放された。また、前367年の（ B ）法の改革以降、それまでの執政官の他に、新たに法務官職が設置され、この後市民法の不備はこの法務官の出す法律を中心に修正されるようになった。ローマの支配領域拡大の結果として、前242年頃には、外国人係として2人目の法務官が設置され、ローマ市民と非市民の問題を処理するようになり、（ C ）法の形成が促された。共和政末期は、様々なローマ法の発展が見られた時代だった。法務官のもとで新たな訴訟形式などが発展し、また俗人の法学者が次第に神官に代わり法解釈を担うようになった。

前27年以降元首政期に入ると、ローマ法は成熟期を迎えた。この時代の政体を反映し、新たな発展が見られた。たとえば、元首（皇帝）の立法権が確立され、その布告が法律（勅法）として認められるようになった。また、民事訴訟において、元首の代理として裁判官が審理する手続が導入された。2世紀には「法学提要」の著者ガイウス、3世紀初めにはウルピアヌスのような著名な法学者が現れ、後の時代に大きな影響を及ぼすことになった。212年には、（ D ）帝により、ローマ市民権が帝国の全自由人に与えられたため、ローマ法はさらに普遍的な性格を持つようになった。

2世紀のトラヤヌス帝の時代に絶頂期を迎えたローマ帝国は、3世紀の軍人皇帝時代の混乱期を経験した後、ディオクレティアヌス帝のもとで専制君主政が確立され、さらにコンスタティヌス帝により帝国東部のコンスタンティノーブルへ首都が移され、その性格を大きく変化させていった。やがて（ E ）世紀に、この地において、ラテン語を主な使用言語とする皇帝ユスティニアヌス帝のもとで、（ F ）を中心とした法学者たちにより、それまでに蓄積されたローマ法の膨大な遺産が収集・整理され「ローマ法大全」としてまとめられた。まず、歴代の皇帝の勅法を集めた「勅法彙纂」、ウルピアヌスなどの著名な法学者からの抜粋を集めた「学説彙纂」、ガイウスを手本としたローマ法の教科書ともいえる「法学提要」が作られ、さらに編纂事業後のユスティニアヌス帝の勅法を集めた「新勅法彙纂」がそれに付け加えられた。ローマ法の遺産を集大成したこの「ローマ法大全」は、その後の時代にローマ法を伝えるうえできわめて重要な役割を果たすことになった。東ローマ（ビザンツ帝国）では、「ローマ法大全」の内容は、ギリシャ語で受け継がれ、独自のビザンツ法学として発展した。

ビザンツ帝国は、1453年にオスマン＝トルコに征服され滅亡するが、その法的伝統はキリスト教後継帝国を自認する（ G ）に受け継がれた。

一方、西ヨーロッパでは、「ローマ法大全」の編纂直後にその写本が作られていたことが知られているが、その後、教会法以外では、ゲルマン人に起源を持つ慣習法中心の社会となり、その存在は長く忘れられてしまった。この慣習法の世界は、ローマ法の世界とは本質的に異なっていた。それまでのように皇帝の公的な裁判官が判決を下すようなシステムは消え去り、当事者同士の和解と賠償金の支払いが基本となり、フランク族を中心に決闘、あるいは焼けた鉄や釜湯を用いる火神判や身体を水に投じる水神判などの超自然的な神判が行われる法の社会となった。

しかし、11世紀後半になると、「ローマ法大全」の「学説彙纂」が突如イタリアの法廷などで使用されるようになった。この後「ローマ法大全」の全体は、十二世紀ルネサンスと呼ばれる知的復興運動の中で徐々に復元されていき、それを中心にして市民法学が学問的に発展した。西ローマの滅亡以後、法学が初めて独立した学科として確立されたのである。キリスト教の聖職者や一般信徒の宗教生活に関係する教会法も、市民法学の影響を受け急速に発展した。このような法学研究・教育の中心となったのが、ボローニャの学校だった。多くの学生がここで法学を学び、西ヨーロッパ中にローマ法を広めていき、やがて各地の王国・地域の法がその影響を受けるようになった。

ローマ法は、主としてより合理的な訴訟手続きや法の概念的枠組みを新たに提供したため、各地域の多様な法慣習を整備し成文化し統一するために利用された。しかし、ローマ法を受容の仕方・程度は、地域によって大きな違いがあった。たとえば、ローマ市民法学がしっかりと確立される以前に独自の発展をしたイングランドのコモン・ローは、ローマ法の影響をあまり受けなかった。これに対して皇帝を擁するドイツ地方では、初期の段階こそ影響は小さかったが、15世紀末以降ローマ法が現行法として急速かつ大々的に継受された。しかし、このような地理的な差異にもかかわらず、13世紀以後西ヨーロッパの各地で成立する大学では地域の慣習法ではなくローマ法が教授されており、ローマ法が人々の法的思考様式の基礎となり、西ヨーロッパの学識層の間で共通の法文化が形成されることになったのである。

ローマ法は近代に入り新たな法の発展に寄与した。ローマ法の（ C ）法は新たな国際法学の出発点となり、やがて17世紀に（ H ）の「戦争と平和の法」などにより自然法を基礎とした国際法学が確立された。しかし、18世紀の啓蒙主義の時代になるとローマ法の意義は次第に変質していき、さらに19世紀には、1804年の（ I ）によって制定されたものを初めとして各国で近代的な民法典などが発布され、ローマ法は現行法としての地位を失っていくことになった。また、19世紀のドイツでは、ロマン主義の影響もあり民族固有の法、ゲルマン固有の法を強調し、ローマ法を外国の法として否定する一派も台頭した。しかし、それにもかかわらず、歴史法学派を創始した（ J ）もローマ法の継受を積極的に肯定しており、さらにドイツ法学の偉業ともいえる1900年のドイツ民法典もローマ法の影響を受けたものだった。このようにローマ法の生命力は実に強いもので、その精神は現在にいたるまでヨーロッパの法体系の基層に脈々と流れているのである。21世紀となり、ヨーロッパの統合が深みを増す中、ローマ法は今後どのような役割を果たしていくのであろうか。

Ⅱ 下記の文章を読み、(A) ～ (J) の空欄に適切な語句あるいは数字を記入しなさい。

アメリカは独立の時点ですでに中国との通商関係を築こうと考えていた。チャイナ・エンプレス号がアメリカの商船として初めて中国に到着したのは早くも1784年であったし、アメリカ人宣教師としては初めて、ブリッジマンが中国に到着したのは1830年のことであった。

アヘン戦争に敗北した清朝は南京条約調印後、1844年にアメリカ合衆国と(A)条約を結んで友好と互惠通商関係を宣言したが、この条約は清にとっては不平等なものであって、アメリカに対して(B)を喪失し、さらに領事裁判権を与えた。

アメリカが中国に進出するだけでなく、中国人もアメリカに多大の関心を寄せていた。中国からは、南京条約による開港都市である広州、福州、(C)、寧波、上海など中国沿海部から国外へ1840年から1900年までの間に約250万人が渡航した。このうち約1割は北米、中南米、ハワイ、オーストラリア、東南アジアなど西欧諸国の進出先や植民地へ向かった。

アメリカへの中国人移民は1850年代に始まった。流入人口は、例えば1871年から10年間で累計では約12万3000人を超えたほどであったが、1882年に連邦議会を通過した人種差別的な中国人排斥法の施行以降では、外交官・商人・学者・留学生の一時滞在者を除く一般労働者の入国が禁止されたため、入国者が激減した。その後のさらなる入国規制によって、アメリカ国内の中国人は1920年にはわずか6万人強までに減少していた。

ところで、中国人はなぜアメリカへ移民して行ったのであろうか。中国では18世紀末近くからは人口の激増期に入っていた。1787年から1850年の期間に中国全体では47パーセント増加のところ、広東省では同時期に80パーセント近い増加率を示した。耕作地の開発が進まなかったほか、家族内の兄弟均分相続による耕地細分化も農民にとっては生活を困窮させる一因となっていた。さらに、19世紀の広東省では干ばつ、洪水、台風、虫害などが収穫量を減少させたが、その被害は重税に苦しむ下層農民に一層の苦しみを与えた。アヘン戦争の賠償金を調達するために清朝が新設した税を払えずに、土地を手放して流民化した農民は広東省では少なくなかった。この中には苦力^{クーリー}と呼ばれる肉体労働者として多額の借金をして海外渡航費を入手してアメリカへ向かった者が多い。上記の自然災害のほかに、1851年から始まり1864年に終息した(D)や省内での先住者と後来の移住民の利害闘争が引き続いて起きていたことも国外への移民を誘発する要因と考えられよう。

1830年代の王国時代のハワイには、中国人はアメリカ本土へ行くよりも早く、契約移民として渡航しサトウキビ栽培に従事した。スペインとの戦争に勝った後、フィリピンやプエルトリコなどを領有したアメリカがハワイを併合したのは(E)年であり、この頃には毎年2000人の中国人がハワイに上陸していたが、19世紀後半には移民の累計は5万人を越えていた。彼らは主に広東省南部から来ていた。

中国では近代国家を建設するために行われた改革に伴って増税が行われ、農民の負担が大きくなっ

ていたことは、海外で華僑や留学生が清朝の打倒をめざす革命運動を盛んにする背景となっていた。広東省の出身であった孫文は1894年にハワイで（ F ）を組織して、革命諸団体をまとめた。

ハワイがアメリカに併合された後には、ハワイにも中国人排斥法が適用されたので中国人に代わって日本人やフィリピン人、そして日清露のはざまにあって1897年朝鮮王朝が（ G ）と改称した後も混乱が続いていた朝鮮半島からの移民が入ってきた。

アメリカ合衆国では東部から西部へ向けてのフロンティアの開拓が進むと、領土も拡大し、メキシコとの戦争の結果（ H ）年にカリフォルニアを併合してからは、太平洋を越える中国への経路ができた。カリフォルニアで金鉱脈が発見されて採掘ブームが始まったのもこの頃であった。

開港された広州にはアメリカ人貿易商人や宣教師が滞在していたが、彼らが伝えたアメリカについての知識やニュースは現地の中国人に刺激を与えた。カリフォルニアにおける金鉱発見のニュースは1年後には中国人の商人を介して広州でも広まっていた、アメリカへの出稼ぎに夢を与えたのであった。（ I ）年にアメリカ最初の大陸横断鉄道が完成したが、中国人労働者の貢献が大きかったことはあまり知られていない。

アメリカでは19世紀後半に工業化が進み、人口を急増させて、1890年代にはフロンティアが消滅した。農村からの人口流入を上回る外国からの移民が都市と農業開発地域に集まった。1860年以降1880年までは西欧・北欧の出身者が多く、それに続く1890年代以降では南欧・東欧の出身者が主であった。前者はアイルランド系を除いて、宗教について言えばプロテスタントが大部分を占め、比較的裕福であり西部に入植する者が多かった。後者は宗教的文化的に多様であったが、新天地アメリカでは都市部の下層労働者として出発した。

資本主義体制下のアメリカで産業が発達して資源開発と工場生産のため、そして交通運輸などの基盤整備のために多くの労働力需要が生じたが、それらは経済水準が比較的到低い国々からの移民を引き寄せる力となった。アメリカはより一層多くの外国人労働者を迎え入れると同時に、1899年から1900年にかけては国務長官ジョン＝ヘイが中国に関して（ J ）宣言を提唱して帝国主義的な政策を推進したが、その意図は中国市場への割り込みにあった。

Ⅲ 下記の文章を読んで空欄（ A ）～（ O ）にもっとも適切な語句あるいは数字を記入しなさい。

数奇な人生が、歴史にはいくつも存在する。これから述べるのも、その一つだろう。彼女の名前はバキタ。カトリック教会が認めたブラック・アフリカ出身の黒人聖女だが、これは本名ではない。彼女は苦難のさなかに本来の名を忘れ、「バキタ」というのは奴隷主がつけた名だ。皮肉なことに、アラビア語で「幸運」を意味する語に由来するという。この経緯からも想像できるように、彼女は女奴隷だったのである。

バキタは1869年頃、現在のスーダン西部のオルゴッサ村に村長の弟の娘として生まれた。だが6歳の頃、奴隷商人に拉致されてしまった。一度は逃亡に成功したが、結局故郷には帰りつかず、別の奴隷商人に売られ、足枷をつけられて砂漠を横断させられたこともあった。その後の8年間に5度も売買され、バキタは非人間的な扱いも受けた。13歳の頃には、奴隷主の命令によって全身に刺青が施され、その後の1ヶ月にわたって高熱に襲われたという。このバキタの人生を理解するためには、彼女が背負ったアフリカの境遇を理解しなければならない。

バキタの故郷は「歴史的スーダン」と呼ばれる地域の一部だ。スーダンとは、アラビア語で「黒人たちの国」という意味だが、この地域には黒人王国が繁栄していた。8世紀以前から11世紀にかけてセネガル川・ニジェール川上流域に建てられた（ A ）王国は金を豊富に産出し、ムスリム商人などを仲介として、サハラで採れる（ B ）と交換するサハラ縦断交易で栄えた。この王国はモロッコを中心とするベルベル人の（ C ）朝によって1076年滅ぼされたが、この地域にのちに建国されたマリ王国なども繁栄を続け、マリ王国のマンサ＝ムーサ王は大量の金をメッカに奉納したことで知られている。これらの王国を支えたのは、前述の縦断交易だったが、奴隷貿易も大きな要素だったという。戦争捕虜や、奴隷の産んだ子供だけでは不足し、そのために周辺の地域を襲って奴隷狩りを行い、売買した。

奴隷は、ある段階の経済にとっては重要な生産手段で、人類のほぼあらゆる社会に見られる。奴隷は過酷に扱われるため、自然な出産では補うことができず、つねに新しい奴隷を獲得する必要がある、そのため奴隷貿易が成立した。特に有名なのはアメリカ大陸への奴隷貿易だろう。16世紀に鉱山やプランテーションにおける強制労働や疫病のためインディオの人口が激減したため、多くの奴隷がアフリカから連れてこられた。その上、スペイン政府が黒人奴隷を確保するために結んだ（ D ）からは大きな利益が期待できるため、列強は競って参入した。そのためもありアフリカでの奴隷狩りは一層激化し、正確な統計は困難だが、その被害者は1000万人を軽く超えると考えられている。また北アメリカ南部の開発が進み、特に18世紀末に（ E ）が綿繰り機を発明して、飛躍的に生産効率を向上させると、黒人奴隷を用いた北アメリカのプランテーションが発展した。（ F ）が著した「アンクル＝トムの小屋」に描かれているように、その奴隷制の害悪は根深く、リンカンが

(G) 年に発した奴隷解放宣言にもかかわらず、問題は現在もお根深く残されている。

しかし奴隷貿易は大西洋をまたいで行われただけではなく、モーツァルトの「後宮からの逃走」やロッシーニの「アルジェのイタリア女」に登場するように、地中海などで海賊に捕らえられて奴隷とされた人々もいただろうし、アングルの一連の絵画に描かれているようなトルコ後宮奴隷たちもいただろう。同様にまたアフリカ東海岸の港市ザンジバルなどからも、奴隷がアフリカからアラビア半島などに連れてこられていた。

バキタの故郷であるスーダンをめぐる状況は、近代になってさらに複雑になった。オスマン帝国が弱体化すると、1805年にオスマン帝国のエジプト総督となった(H)が帝国からの自立をめざし、エジプト勢力はスーダンに浸透した。1882年イギリスがエジプトを軍事占領すると、この地でも欧州列強の力が感じられるようになった。スーダンでは、後の1898年の(I)にも表れているように、列強のさまざまな利害がぶつかっていたのだ。バキタは1882年イタリア人領事によって購入されたが、これもこのような状況を反映している。この頃、バキタは比較的平穏な日々を過ごしていた。だが1881年反英抵抗戦争である(J)がスーダンで勃発し、85年にハルツームを陥落させようとする、バキタは主人とともにイタリアに逃れた。その後、彼女は主人の友人に譲り渡され、新しい主人の幼い娘の世話をするようになった。バキタの運命は一変した。新しい主人が中東へ行き、バキタはその留守の間、主人の娘とともに女子修道院の学校寮に預けられたのである。

1889年主人が戻ると、娘とともにバキタを中東に連れていこうとした。しかし、バキタは拒否し、女子修道院に留まることを望んだ。裁判の結果、バキタは自由の身となった。奴隷解放の流れがイタリアにおいても支配的になっていたのである。1893年バキタは修道女となることを志願した。彼女は修道女として後半生を過ごすことになる。しかし、運命はさらに転変する。1931年彼女の伝記が公刊されると、一躍有名人となった。イタリア各地を訪問して修道院のための寄付を募り、1936年にはムッソリーニとも会見した。ムッソリーニ率いるイタリアは1935年(K)に侵入していたが、それを正当化する一助として、バキタを惨めな境遇から救い出したように、イタリアの植民地政策はアフリカの文明化に貢献するという宣伝の一面も、バキタとの会見にはあったのかもしれない。晩年健康を害したが、バキタは1947年まで生き、78歳で亡くなった。奴隷であり続けたならば、考えられないような高齢だ。バキタは2000年に聖女の列に加えられた。だが、これで彼女が背負ったアフリカの悲劇が解決されたわけではない。

(L) 年は「アフリカの年」と言われるように、17の国々がアフリカで独立した。独立を勝ち取り、さらに豊かな天然資源などには恵まれているにしても、しかし旧宗主国および白人支配層が利権をなかなか手放さなかった。また旧来の白人対黒人という対立の図式がほんのわずかに改善されたとしても、社会的インフラの整備は遅れており、さらには部族主義の対立による内戦やクーデターが繰り返されている。1967年に始まり、ビアフラ戦争とも呼ばれた(M)内戦では多数の餓死者が発生し、写真報道された子供たちの惨状は目を覆いたくなるほどだった。また1990年に勃発した

(N) 内戦では、ツチ族とフツ族の対立が現代アフリカ史最悪といわれるほどの大量虐殺をひきおこし、この内戦をテーマとして最近日本でも上映された映画は静かな、しかし深い反響を引き起こした。バキタの故郷であるスーダンにおいても、ダルフル内戦の嵐が今なお吹き荒れ、死者の数は少なくとも20万人を超えるとされる。アフリカ諸国は「アフリカは一つ」をスローガンに1963年(O) を結成し、2002年にはヨーロッパ連合をモデルにして、それをアフリカ連合に改組したが、アフリカ固有の諸問題の根本的解決にはほど遠い。

IV 下記の文章是北京の歴史について書いたものである。これを読んで、空欄(A) ～(J) に適切な語句あるいは数字を記入し、下線の①～⑤に関連する設問に答えなさい。

北京の歴史の始原を語ろうとする時に、北京 ① 北京原人の名前は欠かせない。北京原人は旧石器時代の人間であり、打製石器を作り、すでに火を使用していた。

そして時代ははるかにくだり、戦国時代の北京は 燕 ② 燕の領域にあった。一国には様々の栄枯盛衰があり、燕もその例外ではなかったが、「弱燕」とよばれた燕の国力は総じてふるわず、最後は始皇帝によって滅ぼされてしまった。その後、この都市は歴史の闇の中に姿を隠し、静かに息づいていたが、唐代に入り、安禄山が(A) 年に北京の近くで反乱を起こすにおよび、にわかに脚光を浴びることとなった。安禄山は洛陽にはいり、国号を大燕と称したが、まもなく暗殺されてしまった。唐が滅びると、キタイ族が北京の地に入り、国号を遼と定めた。この時漢族の王朝は宋であったが、遼と雌雄を決せんものと軍隊を進発させたものの、もとより宋側に旺盛な戦意はなく、1004年に両国は和議を結んだ。この条約が(B) である。さて遼の支配領域の東側には、女真族がいて遼に服属していたが、12世紀の初めに女真族は独立して、国号を金と称した。金は北京に遷都した。金の支配下にあった北京は(C) と呼ばれた。金は当時の宋の都である開封を陥落させ、上皇の徽宗と皇帝の(D) を捕らえ、北方に拉致してしまった。これを靖康の変と呼んでいる。金は積極的に漢化政策を推進したが、そのため華美の風におぼれ、チンギス＝ハンの軍隊が北京を包囲した時、北京を守護していた金の軍隊はひとたまりもなく壊滅した。金王朝自体の命運もこれでつき、やがて滅びることとなった。

その後フビライ＝ハン金は金の旧都に隣接した地域に新たな首都を築くことにした。この都は大都と呼ばれたが、これが現在の北京の原型となる都市である。大都を実見したヨーロッパ人にマルコ＝ポーロがいる。彼は、この都市の城壁がレンガではなく、土をつき固めて作られたものであることや、その城壁には12の門が設けられていたことをはじめ、この都市の様々な情景を報告している。彼の著書

である『東方見聞録』をひも解くことによって、私たちはそうした事実を知ることができるのである。ちなみにマルコ＝ポーロが初めて北京に足を踏み入れた年は、南宋の都である臨安が元の軍隊によって陥落した時であった。彼が元の都に滞在した時は、北京のみならず、中国全体の動きが大きくなうねりを伴いながら、変貌してゆく、まさにその瞬間だったのである。

さて北京の名勝地の一つとして、観象台を挙げることに異論をとる人はいないであろう。現在の観象台は、元に仕えた（ E ）の製作にかかるものである。彼は中国の伝統に根ざした暦である授時暦の制定者としても知られている。こうした科学技術の面ばかりでなく、元は新しい文化が芽吹いた時代でもあった。文学の方面では元曲がそれにあたる。この新しい戯曲を創作した作家たちも、そのほとんどが大都の出身者で占められている。元というのは、このようにして新たな文化が芽吹いた時代であり、かつそれと同時にきびしい民族差別政策をとった過酷な王朝でもあった。

こうした冷酷な政策がほころびてゆくなか、元の中国における支配力は徐々に衰えを見せはじめ、1351年には白蓮教徒によって紅巾の乱が起こされた。この乱のなかで次第に頭角を現してきたのが朱元璋である。彼は長江の下流に広がる広大な穀倉地帯を押さえ、北伐を開始した。朱元璋の率いる軍隊は破竹の勢いで北に向けて進み、ついに大都は彼によって陥落せしめられ、元の政権はモンゴル高原まで後退した。^③朱元璋は1368年に南京で即位し、ここに元に代わる新しい王朝として明が成立した。

彼は自分の子供たちを王として各地に封建したが、彼の寵愛を一身に集めたのが、北京に封じられた燕王であった。燕王はいまだにモンゴル高原に蠢動する元の軍隊と戦って大いに武功を上げ、父親に「燕王によって北方の脅威がなくなった」とまで言わしめた。朱元璋のあと、皇帝の位を継いだのが建文帝であったが、彼は諸王の実力を知悉していた。何とかして彼らの勢力を削減せねばならぬ。建文帝は色々な口実を設けつつ、彼らの力をそいでいった。このような状況下で燕王は狂人をよそおっていたが、そのようなごまかしがいつまでも通用するわけがなく、ついに彼は北京にあって挙兵した。これに対し、建文帝も武力をもって対抗したが、彼の軍略は硬軟がしばしば所を代え、方針が一貫していない恨みがあった。燕王が兵を起こして4年後、ついに南京は陥落した。建文帝は自殺して果てたか、あるいはどこかに逃亡したのか、その行方は杳として知れない。

戦に勝利をおさめたあと、燕王は即位して永楽帝となり、一時南京をそのまま首都としたが、南京の情勢は彼にとって不穏なところがあり、やがて北京に遷都した。永楽帝は宦官の（ F ）に命じてアフリカにまでいたる遠征を行わせるなど、宦官に重職を任じることがあった。これは永楽帝の実力主義から出たことと推測されるが、宦官の重用は明代の政治に大きく暗い影を落とすことになった。とりわけ悪名の高いのが、正徳帝に仕えた劉瑾である。彼は正徳帝とともに放埒の限りを尽くし、さらに剛毅をもってなった学者である王陽明を貴州の片田舎に左遷したりなどしたが、やがてその悪行の数々が白日のもとに晒され、処刑されてしまった。

そして明代末期の万暦帝の治世下、世の中は爛熟の様相を呈するとともに、その背後に退廃と衰亡

の影を宿し始めていた。例えばイエズス会の宣教師マテオ＝リッチが北京入りを果たしたのも、万暦帝の時であった。彼は万暦帝に様々の贈り物を携えてきていたが、中でも自鳴鐘という時計は万暦帝の歡心をかき、彼の北京での布教が許された一因になったとまでいわれている。万暦帝はマテオ＝リッチに対し、北京の一角に教会を建てることを許可し、リッチはここを拠点としてキリスト教の布教に専心した。彼の布教法は、中国の風俗習慣をむげに否定しない柔軟なやり方であり、大局的に見れば成功を収めたといえる。キリスト教に改宗した人々には、文淵閣大学士の（ G ）など著名な知識人や政府の高官も多数まじっていた。そしてリッチが作製した世界地図の（ H ）は、中国人に世界の広大さをまのあたりに教えることになったのである。このような華やかな一面を持つ一方で、晩年の万暦帝は放埒に走って政治をかえりみぬありさまであったし、さらに北京の街頭は惨状を呈し、それは、やがて来る明王朝の終焉を静かに告げる警鐘のようなものであった。

果たして明王朝の落日の日は時ならずしてやってきた。明王朝最後の皇帝である（ I ）が即位したのち、陝西方面に大飢饉が起こり、これを契機として農民の大反乱が起こった。この中で頭角をあらわしたのが李自成である。彼は勢いに乗じて北京に進撃し、またたく間にこの都城を陥落させた。当時、中国の東北地方では女真族が一族の力を結集させ、清王朝を建国していた。山海関で明軍と対峙していた清のドルゴンは、北京陥落の報をきくと、北京入城を「仁義の軍をもって流賊を滅ぼす」ものと正当化して軍を進め、李自成的軍隊を壊滅させたあと、そのまま北京に居座った。ここに清王朝による中国支配がはじまった。

清王朝が、異民族である漢族を屈服させるため、様々な強硬策を取ったことは、辮髪（お辮子）の強要をはじめ、否定することのできない歴史的な事実である。しかしこの王朝は、康熙・雍正・乾隆といった名君を輩出し、特に乾隆の世には、清王朝はその最盛期を迎えたとされている。そして名君乾隆帝に謁見を求めたのが、イギリスの外交官マカートニーであった。マカートニーの一行はいったん北京に入ったものの、^④肝心の皇帝が熱河に滞在中であったため、わざわざその地にまでおもむき、乾隆帝との謁見を果たした。マカートニーの目的は中国との通商条約の締結にあったが、乾隆帝は彼ら一行を手厚くもてなしはしたものの、肝心の条約に関しては一顧だにしなかった。乾隆帝は「中国は地大物博であって、外国との貿易をことさらに必要とはしていない」と言い放ち、使節団の中国からのすみやかな退去を命じた。皇帝の冷淡な態度にマカートニー一行は、なすすべもなく、すごすごとイギリスに引き上げざるを得なかった。しかし、マカートニーは帰国後に著した著書の中で、乾隆帝をソロモン大王に比肩する者としている。外国人の眼から見ても、乾隆帝の偉大さは認めざるを得なかったであろう。

しかし清王朝は確実に衰退の道をたどっていた。乾隆帝が退位して嘉慶帝に位を譲った直後、白蓮教徒が反乱を起こした。この反乱はどうか鎮圧することができたが、清王朝の領域内ではこののちも大小の反乱が絶え間なく勃発した。アヘン戦争・義和団事件をへて中国は半植民地化の道をたどり、辛亥革命によって清王朝は滅亡した。

その後数々の紆余曲折はあったものの、共産党軍を率いる毛沢東が、北京の天安門で中華人民共和国の建国を声高に宣言した時、中国は長期に及ぶ侵略と分裂の歴史に終止符を打ち、一個の新たな独立国家として再生した。

だが共産党政府の誕生は、中国の人々にとって、また新たな試練に過ぎなかった。中華人民共和国建設後の中国は、一言でいえば政治運動の連続であった。一つの政治運動が終結し、再び別の政治運動が展開されるたびに、犠牲者の数は増えていった。特に失脚していた毛沢東が、自己の復権をかけて起こした^⑤文化大革命^⑤にあつては、国内はほとんど内乱の情勢を呈するに及んだ。

こうした事態は毛沢東の死去とともに終焉し、その後の中国は、改革開放政策を提唱した（ J ）の指導のもと、特に経済面で急速に発展していった。そして現在の北京はオリンピックの開催にそなえて、急速に整備されつつある。この先に北京および北京の人々、中国および中国人を待ち受けている未来の光景はいかなるものか、今のところなん人にもその姿を想像することはできないだろう。ただ、完全な変貌を遂げてしまい、古都のたたずまいは著しく損なわれてしまったとはいえ、北京の街並みは今後も、そこで営まれる中国人の喜怒哀楽を、静かに見守っていることに違いない。

- ① 北京原人の発見された場所の地名を記しなさい。
- ② 戦国時代には中国文化圏内の各国で独特の通貨が流通したが、燕の地方で使用された主要な通貨の名前を記しなさい。
- ③ モンゴル高原まで後退したあとの元の王朝名を記しなさい。
- ④ 彼らが北京で逗留した、今は現存しない離宮の名前を記しなさい。
- ⑤ 文革の発動時に国家主席でありながら、その地位を剥奪され、獄死した人物の名前を記しなさい。